千奈美の死恋

あいうえお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千奈美の死恋

【Nコード】

N6987H

【作者名】

あいっえお

【あらすじ】

恋する高校生、新条千奈美。今日も千奈美は人を好きになり、遠くから彼を見つめる日々が続く。しかしその彼が殺人倶楽部に狙われていると知り、千奈美は早速行動を開始する。全ては愛する者を守る為に？ ジャンルは推理、しかし推理する所があまりないという予定になっています。

私プロフィール

青春真っ盛りの花の高校時代。後悔のないように恋愛だけは力を抜こうとは思わない。部活に熱中して県大会優勝狙うのも、勉強をこつこつして将来の基盤を作るのもいいけれど、私の成績表がその二つの道は諦めると諭す。

成績が悪ければ当然、良い高校にも行けず、いや行きたくもなかったけれども、私は凡庸が故に競争率の高い公立高校に数十人の同学年の生徒を蹴落として入学した。

学力ダメ、運動ダメ、音痴の上に絵も下手である私にも、一つだけ神様がくれた取り柄がある。顔がいい。はつきり言えばかなり可愛い。いやどちらかと言えば綺麗か。いずれにしても超がつくほどの美少女なわけだ。

そんな唯一の長所を活かした趣味が恋なのです。ただ私は好かれるよりも好きになって尽くす事の方が理想的だ。だけれどちょびつと冷めやすく、目移りしちゃう時もある小悪魔要素もあつたりする。だが、これでも未だに誰とも付き合った事がない。誕生日が来る度に彼氏いない歴〃年齢の記録を更新している。焦ってはいないし今すぐ欲しいとも思わない。私は片思いで十分だ。

それでも少しはこつちを向いて、目を合わせてもいいと思う。

そう思っただラブレターを書いてみた事もあつたけれど、勇気が足らずに渡せないという出来事もあつたり。

さて、簡易的な自己紹介を終えた所で宣言をしよう。私は今、恋をしている。

最近の日課 1

美人過ぎて近寄りづらいのはわかるけど小学校からずっと友達が少ないというのはいかがだろうか。その数少ない友達でさえ変人という称号を持った人ばかりだ。

中学の頃の親友と呼ばれた香織ちゃんだって今年に入ってすぐに覺せい剤所持で逮捕されたし、小学生の頃によく話した子はみんな自殺した。思い出すと涙腺が緩みそうだけど今は友達がいない事の方が辛い。

体育の時だつてペアを組めと言われたら必ず先生と組まされた。私のクラスの女子を奇数にした奴を心底憎みたい。というか憎んでいる。偶数ならば誰かが私と組んでそこからしこしこ友情を芽生える事もできたのに。はずなのに。

これもどれも全て私の美貌のせいなのかな。ああ、美しさは罪。しかしそんな孤独人にも誰かと一緒に行動することができる学校行事がある。

最初に部活を否定した私だけど、一応部活に入部しているのだ。そう、部活動ならば半強制的に皆と一緒にいる機会が増えるのだ。まあそんな理由で入部したんじゃないけれど、ものついでに部員とフレンドリーな関係になろうかななんて考えてはいる。

今日の放課後も部活動があるので、私はそれに参加して友好を上げるのだ。素晴らしい作戦ではないか。

普通の部活ならば各教室で活動をするわけだが、私の通う部活は家でやる事になっている。だからいつも寄り道はしていない。

人通りは少ない方である一軒家の立ち並ぶ通学路を逆に進んでみると、目的地が視界に入ってきた。クリーム色に塗りつぶされた二階建ての建築物は威風堂々とそこにあつた。

少々豪華なレンガ造りの門を越えて、当然のように首にチェーンでぶら下げていた鍵で開錠して扉を開けると生暖かい空気が体をす

り抜けて外へ逃げる。

「ただいま」

玄関にて鍵をかけて帰宅の挨拶を試してみた。返事はない。嬉しい。パチンコか、それとも事故って死んだか。後者である可能性を祈りつつ、靴を揃えて洗面台で手を洗ってから自分の部屋へ続く階段を上った。途中、居間の方から異臭がしたが気にしない。

一軒家として平凡な大きさの我が家（？）はきちんと家族（？）分以上の部屋数はあるが、そのほとんどが物置と化しており、年末の大掃除というイベントとは無関係だ。

でも私の部屋だけはきちんと片付けて綺麗にしていた。それは義父への結界という意味もあった。

義父と同じ家に住むという胸糞が悪い事実に対して、少しでも抵抗するために「私はあなたとは別の世界に住んでいるのよ」と自分の部屋（仮）だけは特別だと思い込んだ。

汚い義父の家。私の綺麗な部屋。ここには大きな差があるのだ。汚くしてしまつたら私の部屋が義父の家の一部になってしまうので掃除機は常に部屋に置いている。

まあ掃除をするのは年頃の女の子なら普通ですよ。いい女は身の回りも綺麗っていうしね、多分。

軽い鞆を机の下に放つてから、机の上に設置してあるノートパソコンを起動する。

私の部活には入部に至つての条件がいくつかある。その内の一つがインターネットに繋がる端末を持っているか否か。流行の携帯電話でもできるらしいが、残念ながら私は持っていない。でも代わりにパソコンから接続ができるから問題なし。

あまり詳しくはないのだが、インターネットで検索したりメールを見たりする事はできる。さしずめ時代に順応した美女だ。

くるくると回転するキャスター付きの椅子に腰を下ろしてマウスに手を乗せた。まず確認するのは電子メール。それも無料で取得したフリーメールアドレスのだ。

数件きているメールをざっと見渡し、全てメールマガジンだとわかってから消去した。血のおかげか知らないけれど、見ないものは消さないと気がすまない。

さあここからが本番だ。ブックマークしてある『部活』をクリックしてあるホームページを開く。

すると、黒い背景に白でゴシック体で『殺人倶楽部』と大きく横書きされたサイトが表示された。飾り気が全くなく、管理人に人々呼び込む気がないのが一目瞭然で、それがまた不気味に見える。

一目みただけでは、ホラー映画かなにかのホームページだと思われるだろうが、殺人倶楽部は存在する。証拠は私が殺人倶楽部の部員だから。

タイトルの下には小さくルール、掲示板、緊急連絡先、との白い文字があつてちゃんとホームページの形を成している。

掲示板の文字をクリックすると、新たなページに飛んだ。先程と同じように黒い背景に白文字ゴシックで『殺人名簿』とタイトルされている。タイトルのしたには名簿らしく名前が複数あり、その中の荒木望という名前をクリックする。

望はのぞむと読み、女ではなく男だ。

私が殺人倶楽部の部員になった理由はこの望くんの為だ。望くんが殺人倶楽部の部員なわけではない。むしろ逆で、望くんは殺人倶楽部のターゲットにされているのだ。

愛する者が命を狙われているなんて、燃えるシチュエーションじゃない？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6987h/>

千奈美の死恋

2010年10月30日10時45分発行